０３／０３／２３　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：生活の聖さを追及する
聖書箇所：ペテロの手紙第一　１章１３－２１節

救われた私たちはどのように生きてゆくのかをペテロは教えます。クリスチャンは神の前に責任があります。正しく生きてゆくこと、神に喜ばれることを行なってゆくこと、そこに神が働かれ、神の栄光が現わされるのです。一人一人の信仰が成長してゆくこと、このような責任があるのです。この責任を果たしてゆくことによって私たちは主に似たものへと変えられてゆきます。
ペテロもまたパウロも、「どのように生きてゆくのか」を教えるとき、初めに「～しなさい」とは言いません。それは「～しなさい」と言われると、私たちの罪のゆえにそれに対して反発が起こるからです。彼らは勧めをするときの弊害を知っていたからそのようには言わないのです。なぜなら、心が伴わない形だけの生き方になってしまうこと、また、それが重荷になってゆくからです。まず、神の恵みのすばらしさを教えます。これはいつの時代にも変わらない普遍的な、そして大切な鍵だからです。
今日は１：１３－１６を学んでゆきます。ここから二つのことを見てゆきましょう。

☆ クリスチャンはどのように生きてゆくのか

１．主に会う備えをした生き方をしなさい　　１３節
「ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」と、１３節の初めに「ですから」とあります。このような恵みをいただいたのだから、救いの祝福をしっかり覚えなさいと言い、続いて、どのように生きてゆくのかを教えるのです。あなたは今日、主に会う備えができているでしょうか？永遠の希望をいただいた私たちはただ漫然と、日々無駄に過ごしてはいけないのです。今日、主にお会いするその思いでこの日を生きるのです。世の人のように根拠のない希望にすがっている人とは違うのです。クリスチャンは主に会う備えをした生き方をするはずです。
１）「心を引き締め」＝「引き締め」とは衣の裾を腰の帯にたくし上げるということです。動きやすくするためです。「心」は行動、態度を制御するところです。心の伴わないどのような礼拝も働きもむなしいと言うのです。この心を引き締めてゆくこと、整えてゆくこと、神は私たちの心を見られるからです。箴言２７：１９には「顔が、水に映る顔と同じように、人の心は、その人に映る。」とあります。正しい心から神への正しい思いが生まれてゆくのです。心から従順に歩みをなしてゆき、心からの神への感謝と喜びをもって成してゆく行いへと導かれて行きます。
２）「身を慎み」＝落ち着いてぐらつかない、しっかりとした姿勢という意味です。同じペテロの手紙第一４：７「万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」。また５：８は「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」とあります。あなたの信仰を妨げるものに惑わされてはいけません、と言います。私たちはすぐにこの世のものに惑わされてしまうからです。４：７では祈りが妨げられないように「身を慎み」なさいと、５：８では悪魔の誘惑に負けないように「身を慎み」なさいといいます。また、パウロはコロサイ３；２で「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と、またヨハネは、Ｉヨハネ２：１５、１６で「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮し向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」と言っています。天に宝を積みなさい、世のものに目を奪われると、誘惑に負けてしまうからと言うのです。クリスチャンが神の前に立つ時問われることは、神のみこころに従って生きてきたか、ということです。私たちは世の価値観に捉われない歩みをするはずです。神に喜ばれることをよく考えるように、すなわち、みことばに立つことです。
３）「もたらされる恵み」＝この恵みとは完全なものに変えられることです。これは神の約束です。クリスチャンはそのことを「ひたすら待ち望み」ます。この部分の原文（ギリシャ語）は、「あなたに与えられる恵みの上に全面的にあなたの望みを掛けておきなさい」、といいます。全面的とは完全に、十分に、ということです。これは１００％間違いなく起こることだというのです。この希望、「キリストが帰って来られる」は確信なのです。

２．主のきよさを追求して生きる　　１４－１６節
「従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あるゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。』と書いてあるからです。」
「従順な子どもとなり」というのは、彼らが何者であるかを教えます。１：２には「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。」とあります。この手紙のあて先は救われたクリスチャンです。また、エペソ２：３には「私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、…」、同じ５：８にも「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」と、これは救われていない人々の特徴です。「神に従って行こうとする人」、これがクリスチャンの定義です。あなたはもう救われたのだから従順な子どもとなった、今は主にあって光となったのだから、神に従順であるべきだと教えているのです。それは、聖潔、きよさにおいてです。
「無知であったときのさまざまな欲望に従わず、」、快楽のままに生きていた救われる前の自分ではないのだと言います。救われる前は無知であったのです。エペソ４：18を見ましょう。「彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。」と、罪によって、真理が何かを考える能力が麻痺してゆくというのです。それゆえに、神のいのちをいただくことはない、天国からかけ離れている、救われることがないというのです。その原因はどこにあるのか、「彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに」、これが原因です。神はご自分を明らかに示しておられます。にもかかわらず、人はそれに心を開こうとしないのです。「かたくなな心」と、自分の意志によって罪の中に留まり続けようとする選択です。ローマ１:21「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」と、本当の神がどの方かを考えないと言います。みことばからその神を知らされているのに、その方の前に心を開こうとしないと言います。また、同じ２：５，６には「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。」とあります。神の真理に耳を傾けない私たちに問題があるのだと言います。その結果は「神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。」です。救われる前の私たちはみなこのようであったのです。
「従う」とは、その模範に倣って生きてゆくという意味です。このことばはこことローマ１２：２「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」の二ヶ所にだけ出てくることばです。「欲望に従わずに」とは、かつて自分の行動、考え、生活を支配していた欲望に支配されてはいけない、と言うのです。そしてこの「従わず」は受身ですから、もうそのような欲望から解放されたのだから、支配されるのではなく、今度はそれらを従えて、支配して歩んで行くようにと言います。神は新しい生き方をするようにと私たちに言われるのです。
なぜこのような歩みをするようになったのか、それは神が私たちを「召して」くださったからです。「召して」とは呼び出したという意味です。罪の中から名指して呼び出してくださったのです。救い出してくださったのです。ゆえにクリスチャンは罪から離れようとするのです。クリスチャンの特徴です。そして、神にならって行こうとします。イエスが歩まれたように生きて行こうとします。このような変化が私たちに起こっているのです。もし、救われていると言っていながら、罪の中を平気で歩み続けているなら、神に喜ばれる歩みをしたいという思いがなく、救われる前と同じように罪を愛し、罪の中に浸かって何の抵抗もなければ、その信仰を見直す必要があります。救われていない可能性があるからです。
「あるゆる行ない」、このことばは新約聖書に１３回出てくるうちの８回はペテロが使っています。信じていない人の悪に生き方にも、信者の正しい生き方にも、このことばを使っています。これは、私たちの行動だけでなく、その心の思い、考え、動機のすべてにおいて聖なるものとされなさいというのです。
なぜなら、１６節「わたしが聖であるから」です。神の聖さにならって行こうとするのです。それだけでなく、私たちは聖くされたものだと言います。「聖」とは、すべての神を汚すものから離れるという意味です。「聖さ」とは「異なった」という意味です。たとえば、「神殿」はほかの建物と異なっていたから聖なるものと言われました。また、「安息日」もほかの日と異なっていたから聖なる日と呼ばれたのです。神が「聖」であるといわれるとき、それが罪のない聖い方だというのとともに、ほかの神と呼ばれるすべてのものから異なった、ちがう存在であると言うのです。同じではないというのです。ゆ

えに、私たちもこの世と同じであっては聖ではないのです。この世の価値観、関心と同じではないのです。私たちが神に従って行くなら、この違いは明白になって行きます。当然、そこには摩擦が起こります。しかし、このように生きて行くことによって、神の栄光が現わされて行きます。神が私たちのうちに働かれ、わざを成され、それによって世の人々は私たちのうちに真の神を見、その神の方に引き寄せられて行くのです。この目的のために私たちは生かされているのです。
そして、これらすべては、クリスチャンに可能であるとみことばは教えるのです。